

「そり」と「むくり」

三 春

炎天下、隣の実家で屋根の葺き替えが始まった。真っ黒に日焼けした職人たちが日陰ひとつない屋根の上を地下足袋でひよいひよい歩きまわる。兄いも若い衆も引き締まった肌に汗が光っている。アチラとコチラとは中庭を挟んで向かい合っていて、アチラの屋根はコチラのベランダより少し低いだけ、目が合ってしまうようでどうも落ち着かない。鉢植えの水遣りもコソコソと、ましてや下着なんぞ外にぼやぼや干してはなるまい。

黒い素焼き瓦がはずされ、その下の経木のようにペラペラな木端の表面を箒で掃きだしたら 60 年以上前の葺き土が煙のように舞い上がって風に運ばれてきた。私は窓をきっちり閉め、ブラインドを下ろして隙間から覗き見る。

次は防水シート貼り？ そんなツルツルのつぺらぼうじゃ瓦が滑り落ちるのにと要らぬ心配をしていたら、その上から薄いスレート瓦を打ち付け始めた。「えっ、あの素焼き瓦を使わないの？ どっしりして好きだったのに……」と、自分の家でもないのに身勝手な執着ではある。

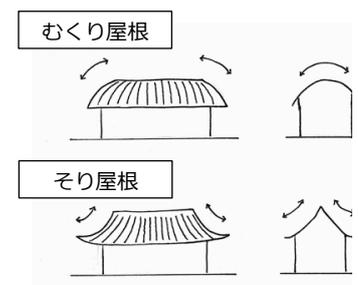
ところで、昭和の建物によく使われた素焼き瓦は断面が波型（S字状）で、反った部分「そり」と膨らんだ部分「むくり」を組み合わせた形をしている。日本建築にはこの「そり」と「むくり」が随所にみられる。

例えば、長い梁は水平に取り付けると中心が下がって見えるが、むくりにしておけば水平に見えるだけでなく、強度が増すうえに、見た目にも圧迫感を与えない。法隆寺の回廊の梁はもちろんのこと、いつか見た古民家の天井を横切る大木のむくりは実にカッコよかった。



法隆寺回廊のむくり梁

そりとむくりの身近な例は屋根の形だ。ネット情報によれば、傾斜面が凸状に湾曲しているむくり屋根は軒へ近づくほど勾配が急になるので雨水のキレが良い。逆に、凹状のそり屋根は軒へ近づくほど勾配が緩くなるので雨水のキレは悪いが、軒下が広くなるので雨の降りこみや日光から建物を守ることができる。



そり屋根は寺社や城郭に多く、格式や荘厳さを表している。むくり屋根は格式や厳めしさを抑えた自由な表現として風流人に好まれ、数寄屋造りや茶室などに生かされてきた。

建築に限らず、「そり」と「むくり」は身の回りに溢れていて、見つけるたびに嬉しくなる。